新型コロナウイルス肺炎

この原稿を書き始めた4月中頃は新型コロナウイルスによる肺炎が世界で猖獗を極め，日本でも非常事態宣言が発令されている．この肺炎は画像上間質性肺炎であるが，ステロイド投与は奏功しないようである．一方関節リウマチの治療に使われるIL-6阻害薬の治験が始まっているとのことで，最初に聞いたときは驚いた．サイトカインストームが起きているのであればIL-6阻害薬が効くこともありえるだろう．しかし明らかな感染症に対してIL-6阻害薬を使うのはなかなか勇気がいることである．

ステロイド抵抗性の急性・亜急性の間質性肺炎といえば当科ですぐ思い浮かぶのは抗MDA5抗体陽性の皮膚筋炎患者に合併する急速進行性の間質性肺炎である．他の筋炎患者の間質性肺炎に比べて予後が非常に悪く，ステロイドにシクロホスファミド，カルシニューリン阻害薬を併用して何とかコントロールできるかどうかという病態である．強力に免疫抑制をかけるため当然感染の合併が起きやすく，その対策にも心を砕くことになる．2018年獨協医科大学の倉沢和宏先生らのグループが「Janus kinase阻害薬が有効である」という報告をRheumatology誌に発表されており，翌年中国のグループが同様の報告をNEJMのレターで報告していた．大変興味深い報告で，われわれも参考にさせてもらっている．新型コロナウイルス肺炎の予後不良因子に血清フェリチン高値が報告されているが，抗MDA5抗体陽性の間質性肺炎でもそれは同じである．一方，抗MDA5抗体陽性間質性肺炎でIL-6阻害薬が効くという話は聞かない．当然共通点と相違点があるのだろう．

今後この感染症がどうなるか予断は許さないが，世界中の医学関係者の研究が集中することになり，きっと遠からず良い治療法が生み出されると信じる．そしてそれがまた，他の難治性間質性肺炎の治療法にも良いヒントを与えるのではないかと期待している．

（自治医科大学附属病院アレルギー・リウマチ科
佐藤浩二郎）